

書 評

加茂直樹、小波秀雄、初瀬龍平(編)
『現代社会論—当面する課題』

柏岡富英

現代社会論の構築をめざして

「現代社会学」は、この10年ほどの間に全国の大学で急速に普及した学部・学科名称である。受験産業大手の旺文社によると、2006年現在で、約20校が現代社会学科を開設しているか、設置認可を申請している。学部を開設しているのは6校で、平成7年開設の愛知淑徳大学が一番の古株らしい¹⁾。

各校のカリキュラムにはずいぶん大きなばらつきがあって、現代社会学という分野が未だ揺籃期にあることを示している。たとえば広島国際学院大学が社会学を前面に押し出している（現代「社会学」）のに対し、同志社女子大学では社会学の色彩はきわめて薄い（「現代社会」学）。しかしむしろ共通点も多く、おおむねどの学校のパンフレットも従来の学問分野を超えた総合性や多角性、あるいは履修の自由度の高さを強調する。またフィールドワークなどを通して、激しく変化する社会に対応できる視野と問題意識をもち、その問題を自分で考え、解決策をまとめ上げる専門的な知識、提案できる表現力を身につける、というのが典型的な謳い文句である。上に引用した旺文社の「パスナビ」は、ある大学の現代社会学科では「社会で起きることすべてが研究テーマとなる」と評していて、潜み笑いを禁ずるのがむずかしいけれど、実はどの大学案内にも、おおむねそういう意味のことが書いてある。

現代社会学科のもう一つの特徴は、上記20校のうち女子大学ないし元・女子大学が約三分の一を占めることだろう。旧来、女性の高等教育が家政学と文

学に特化していたのに対して、社会科学を中心にしたカリキュラムへの需要が高まり、大学が敏感にこれを感じ取った結果と言えるだろう。

大学の組織としての現代社会学がこのような中心的傾向をもっているなら、『現代社会論』という書物が「執筆者それぞれが自ら関心をもつ現代社会の特定の課題について、各自の専門とする学問分野から、現状を解明し、さらには解決方向を模索して」おり、「そのために、論題の設定と議論の展開の仕方は多様となっている」こと、また「論文の多くが、読者として女子大学生を想定した議論をしている」²⁾のはきわめて自然な成り行きと考えてよからう。

現代社会が、解決すべき問題に満ちていると感得されるのは、二十世紀の近代文明を生きてきた人たちが常識的に自明としてきた考え方、行動の基準、慣習、社会制度などが、ここに至って自明ではなくなったこと、さらに近代文明を全体として支えてきた「大きな物語」（イデオロギー）の信憑性が失われたことによる。別の言い方をすれば、大きな物語についても小さな物語についても、従来「当然」として受け入れられてきた社会的範疇（カテゴリー）や範疇相互の関係が、実はそれほど当然ではないと考えられるようになったのである。ポスト・モダン論や「現実の社会的構築」論は、まさにそういう社会背景の中から台頭した問題意識と理解することができる。

たとえば女性にとって、結婚して家庭に入り子供を産み育てることが最大の幸福であり、政治に参加するなどは男に任せておけばよいというジェンダー・カテゴリーが疑わしいものとなった。このジェンダー・カテゴリーを信じている人にとって、坂爪論文はきわめて残酷な図柄を描き出している。

1) <http://passnavi.evidus.com/>

2) P. ii.

ただし竹安論文では、女性地方議員が少ないのは、実のところ、このカテゴリーがまだまだ力を保っているためだということになる。また依田論文は、戦後一貫して人々が「良きもの」と信じてきた民主主義体制のもとでは、政府が過重の負担にあえぎ、その結果政府の暴走を招来する可能性をはらんでいることを指摘する。初瀬論文は新しい戦争の形態を論じることにより、またバコシ論文はEUの軌跡を辿ることにより、国民国家という「自明」のカテゴリーの限界を論じる。国民国家の外縁が実はきわめて曖昧であるという意識は、また嘉本論文（国際結婚）や嘉納論文（帰国子女）の根底をなす。「地域」や「環境」についても、自明性のゆらぎが問題意識を喚起し、具体的な行動に人々を駆り立てていると言えるだろう。

論題が多岐にわたるため、この本の特徴をひとまとめにして語るのはむつかしいが、本書と同じ出版社が刊行する『新版 現代文化を学ぶ人のために』³⁾と比較すると、いくつかの手がかりがえられる。『現代文化』で取り上げられているトピックは、都市文化、消費文化、情報文化、グローバル文化、ジャーナリズム、映像化社会、文学、ポピュラー音楽、新新宗教、旅行文化、ファッション、スポーツ、医療、愛と性である。「社会」と「文化」の違いはあるものの（現実的には、二つの言葉は互換的に使われると考えてよい）、二つの間には、我々を取り巻く生活環境の特徴付けにおいて大きな共通点を見とることができる。

逆に、『現代文化』には取り上げられず、『現代社会論』に取り上げられた課題は「就職」、「未婚、離婚、家庭内暴力」、「地域社会」、「国家、国家連合、戦争」、「環境」などであり、いわゆる社会問題の中でも日常生活を送る上での「実践的問題」に力点があることがわかる。『現代文化』が、人文主義的ないし文明批評的立場から「認知的問題」に力点を置

いているのに対し、『現代社会』には、それこそ持続可能な生活形態に関する強い危機意識と問題解決志向がうかがわれる。編者が言うように、歴史上のあらゆる社会には「実に無数の問題がつきまとい、それが社会問題として自覚される」。その意味で社会問題は決して現代社会の専売特許ではないけれど、社会変化のスケールとスピードにおいて近代文明が突出していることも確かであろう。そういう大変化の中であって、学生が「自ら問題を発見し、その解決に取り組む」ための問題整理をしておこうという意図が、ここには顕著に見られる。とくに、一般的には女子大学生の興味を引きにくいと考えられている戦争論や国家論あるいは経済統合をめぐる本格的に取り組んだ論文が収められていることを高く評価すべきである。

もう一つの違いは自然科学の視点からの切り込みが取り入れられていることである。科学・技術の驚異的な発展は確かに現代社会の一大特徴であり、これに伴う「環境問題」は人類の生存そのものを脅かしている。現代社会を扱うカリキュラムや書物は、「話を広げすぎる」危険を冒してでも、そして女子大学生の人気を博さなくても、自然科学の知見を提供しなければならない。

第三に、これは「認識上の問題」にかかわるが、萌芽的とはいえ、現代社会をとらえるための包括的モデルが提示されていることに注目すべきである。広い意味での「数理モデル」は、それを理解したり構築したりするには相当の訓練を必要とするうえ、数理モデルにコミットする研究者が、モデルそのものの精緻さや優雅さに邁進して、門外漢に語りかける努力をおこたる傾向をもつため、一般的に敬遠されがちである。しかし水野論文や坂爪論文が、やさしく噛み砕きながら突きつけてくるチャレンジを避けて通るのは知的怠慢というものだろう。

とは言え、このチャレンジは考えれば考えるほど、

3) 井上俊（編）『新版 現代文化を学ぶ人のために』（世界思想社、2002年）。

逃げ出したくなるような大きさをもっているのだ。現代社会を論じることの難しさは、まさにここにある。つまり、執筆者のだれにとっても、この本に収められている論文のうち、一つか二つを除いてはみんな門外漢なのである。そこから、大きく言って二方向の困難が生じる。

第一に、オムニバス形式の授業以外で、この本を教科書に使えるだろうか。だれが、この本の全体を包括する枠組み（メタ現代社会論？）を提示することができるだろうか。これは、むろん、個別と全体という古い問題の具体例に過ぎないが、実践的には、たとえば学生が就職面接に臨んで「現代社会学とは何を勉強するのか」と訊かれたときに、「まあ、いろいろ勉強しました」という以上の返答ができるのか、に関わっている。そして、それはそのまま、「この本には何が書いてあるのか」という質問に対して、各著者がどう返答するかということと重なり合うのである。

第二に、どこまで手を広げたら（あるいはどの領域をカバーすれば）、「一応」現代社会論を修めたと言えるかという問題がある。具体的には再び「教科書問題」が浮上してくる。たとえば経済学ならサ

ミュエルソンを読めば、一応の入門を果たしたと言えるでしょう。そういう意味で、イニシエーションとしての標準教科書をつくれるかどうか、現代社会論の成熟（あるいは成立）を計るメルクマールになるだろう。話を無限に広げるわけにはいかない（この本は、すでに十分に厚い）。しかし『現代文化』が取り上げて『現代社会』が取り上げなかった問題のうち、少なくともいくつかは京女の現代社会学科のカリキュラムに含まれているテーマであり、今後この本を改訂する機会が訪れたときには取り込みを検討しなければならないだろう。

日本で最初の現代社会学部が設置されてから、まだ十年しか経っていない。この新しい研究領域で、そこに集まった教員が共同して『現代社会論』を編んだということ自体を快挙と評価すべきである。この本は、少なく見積もっても現代社会学の素材を提供することに成功した。次編では、いくつかの個別イシューを設定して、それを多方面の研究者が論じてみせる、というスタイルをとってはどうか。そうすることで現代社会学の外縁と統合モデルとを、今少し明確に打ち出すことができるように思う。

（柏岡富英：京都文教大学人間学部教授）